

## 「知る」は指標詞だろうか

神山 和好 (KAZUYOSHI KAMIYAMA)

茨城工業高等専門学校

「水槽の中の脳」というよく知られたシナリオがある。

ある人が夜寝ているところを謎の一团により拉致され、マッドサイエンティストにより脳だけ取り出され、培養槽のなかで電氣的に生かされ、現実の経験と完全に同じ経験を体験するようになったのが「水槽の中の脳」である。

このシナリオを使った懐疑論的論証がある。

- (1) 私は自分が水槽の中の脳ではないことを知らない。
- (2) もし私が自分が水槽の中の脳ではないことを知らなければ、私に手があることを私は知らない。

したがって、

- (3) 私は手があることを知らない。

懐疑的結論(3)の解消策としてここしばらく有力視されてきたのが、文脈主義 (*contextualism*) である。それによれば、「個人SはPであることを知っている」と言うときの「知る」は、「私」、「いま」、「ここ」等の指標詞の一種である。文脈ごとに「知る」の意味 (この場合、「SはPであることを知っている」という文の真理条件) は変動する。

文脈主義は、上のパズルに対して次のように解答する。

自分は水槽の中の脳であるかもしれないという懐疑的仮説の登場は、「知る」が満たさなければならない基準を上げる (自分が水槽の中の脳ではないことを知るためには、自分が水槽の中の脳であるという可能性を排除できなくてはならない)。その高い基準の意味で手があることを私は知らない、とその議論は言っている。これは間違いではない。たしかに高い(強い)基準の意味では私は手があることを知らない。しかし、そのことは日常的な知るの意味で手があることを私が知っていることと矛盾しない。日常的な文脈では、関連する代替可能性 (たとえば、交通事故の影響で私はしばしば幻影を見る。手術で片手を失っているのに「手がある」と判断してしまう) を排除できれば、手があることを知っていると言ってよい。この文脈では自分が水槽の中の脳かもしれない、といった可能性は無関係であり、無視してよい。

「私は水槽の中の脳である」という懐疑的仮説の登場とともに、「知る」の基準が上がる、と文脈主義者は言う。そして、その想定を使って、つまり知識基準の高低差を使って、懐疑論的論証に答えている。

文脈主義のその想定は誤りだ、と考える立場がある。不変主義(*invariantism*)である。不変主義は、文脈にかかわらず「知る」の基準は一定であると考えている。文脈により変化するのは、知っているとして主張するために要求される証拠ないし正当化の基準であり、「知る」の基準そのものではない。知識基準の移動は存在しないから、それを理由に懐疑論に答えるのはアドホックである。(不変主義の読みでは、懐疑論的論証はただ一つの「知る」についての論証であり、それは、その特定の「知る」の意味で「手があることを私は知らない」と言っている。)

ここに見られるのは、「知る」の意味に関する基礎的な対立である。

歴史的に先にあらわれたのは不変主義 (P.Unger, *Ignorance: A Case for Scepticism* 1975) であり、文脈主義はそれに対する批判者として登場した。昨今の文脈主義の「繁栄」を見ると、不変主義は打倒された先の王朝のようにも思える。そうではない、それは現在なお文脈主義の最大の脅威である、と指摘するのが、文脈主義の主唱者の一人 DeRose である。(近年「不変主義」の立場が提唱されているが (*Subject-Sensitive Invariantism* (Hawthorne 2004), *Interest-relative Invariantism* (Stanley 2005))、DeRose はそれらをさしたる脅威だとは認めない。「古典的不変主義」—Hawthorne や Stanley らの「不変主義」に対し、Unger が最初に述べ、ここまで説明してきた立場を DeRose はこう呼ぶ—こそが文脈主義に対する真の脅威である、と認める。ここで取り上げる「不変主義」も古典的不変主義の意味でのそれである。)

最近 DeRose (2002) は、不変主義を自ら再定式化した上で、Williamson (2002) らの「主張の知識説」 (*the knowledge account of assertion*) を援用しながら、不変主義を論駁し、文脈主義を擁護する一般的な議論を提案している。ここでは、それを検証する。DeRose の文脈主義擁護はうまくいっていない、したがって、懐疑論に対する文脈主義的解決も、いくつかある別の反論とともに、強力な反論にさらされたままである、と論じる。

#### 文献

K.DeRose(2002): "Assertion, Knowledge, and Context," *Philosophical Review* 111, 167-203.

T.Williamson(2002): *Knowledge and Its Limits*, Oxford University Press.